

水平思考を生かした国語科授業モデルの検討 ー「読みの方略」を獲得するシックスハット法の活用ー

赤木詞友*

香月正登

An Examination of National Language Classes Model Utilizing Lateral Thinking - The Use of the Six Hat Method to Acquire 'Reading Strategies'- Shiyu Akagi Katsuki Masato

要 旨

本研究は、教科内容の一つである「読みの方略」の獲得のために水平思考における思考法の一つであるシックスハット法を活用した国語科の授業モデルを提案している。まず「読みの方略」とシックスハット法の関連を明らかにした。次に、大学生への検証を通して水平思考は読みの方略の獲得に効果的であることを見だし、小学生へシックスハット法を用いた国語科の授業を実施することでシックスハット法を用いた国語科授業が読みの方略の獲得に有効であることを確かめた。検証結果をもとにシックスハット法を活用した国語科授業のモデル案を提案している。

キーワード：教科内容 水平思考 読みの方略 シックスハット法

I 研究の動機と目的

鶴田（1995:85）は国語科の内容について、教材内容、教科内容、教育内容をそれぞれ定義し、以下のような構造図を示している（図1）。

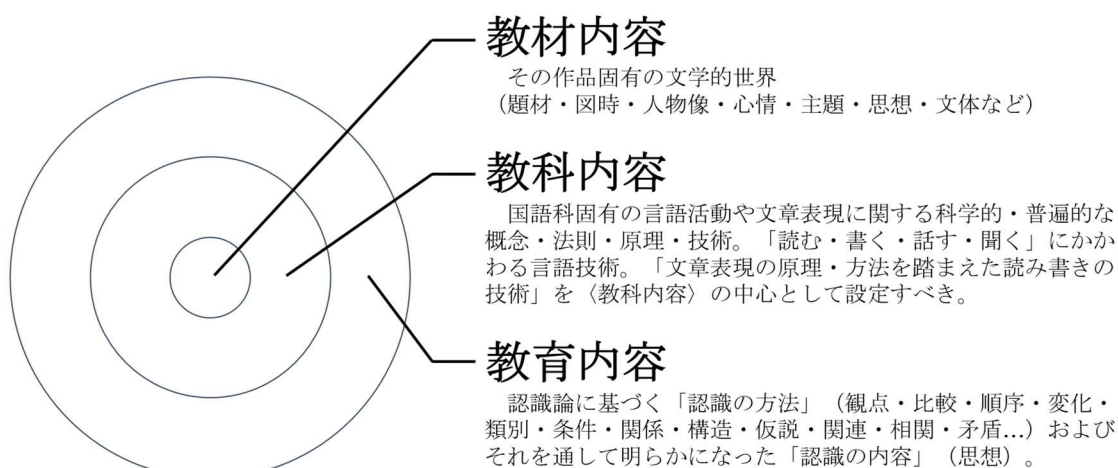


図1. 鶴田の教材内容、教科内容、教育内容についての定義図

鶴田は教材内容に留まらず、教材内容を理解した上で教科内容を学び、これらを踏まえて教育内容の指導にあたることとしている。

*北九州市立小学校教諭

稿者は、文章読解において、読みの視点を持って文章を読む経験をし、教科内容・教育内容を身に付けていくには教材内容に留まらず様々な読解や読書の中で生かすための方略意識をもつ必要性を実感している。方略意識をもつことは、子ども達が読解に向かう時に教材内容を越えた学びになる。

本研究の目的は、子ども達が「読みの方略」を獲得するための授業モデルを作成することである。ただ単に「読みの方略」を子ども達へ教える授業ではなく、読みの経験を通して自覚的に方略を活用できるようになる授業を目標とする。読むことに伴う思考について、「水平思考」に着目した。水平思考の多面的・多角的な視点から物事を捉える思考法に「読みの方略」との関連性を見出すことができる。

II 先行研究の検討

1. 読みの方略について

山元（2005:369）は、「自立した読者として学習者を育てていくには、読むことについての意識を学習者のうちに育てていく必要がある。」と述べ、読みの〈方略〉に関する基礎論の検討をおこなった。山元は〈スキル〉と〈方略〉をパリス、ワシクとターナー（1991）の定義を用いて次のように捉えている。

〈スキル〉

書記素と音素とを照応させるとか、物語を要約するとかいったレベルでの自動的な情報処理技術のこと。専門技術であるとか、繰り返された技術であるとか、指示に従順に従うとか、あるいは運よくとか素朴な使用といった、さまざまな理由で無意識の内にテキストに適用される。

〈方略〉

ある目標を達成するために慎重に選ばれた行動である。スキルが意図をもって用いられた場合にそれが方略となる。

つまり、スキルは無意識の中で可能な情報整理、方略はスキルをつないだり効果的に活用したりすることを通して読みを行うことである。

読みの方略の具体について検討する。山元（2005:377）は、ビーチ（1987）の学習者が読みの〈方略〉を行使できるようにするための一つの手段として考案した「課題への反応方略」を参照し次のように示している。

「課題への反応方略」

- ・没入する
- ・関係づける
- ・記述する
- ・解釈する
- ・判断する

「課題への反応方略」を活用していくには、読みの経験が鍵となる。経験の中でスキルを身に付けたり組み合わせたりすることが方略となる。例えば、「関係づける」ためには作品の登場人物を把握したり、今までの読み手の経験を結び付けたりと関係づけるための基が必要となる。

吉田（2010,2017）は、「優れた読み手が使っている方法」として次の通り挙げている。

「優れた読み手が使っている方法」

- ・関連づける
- ・質問する
- ・イメージを描く
- ・推測する
- ・何が大切かを見極める

- ・ 解釈する
- ・ 他の効果的な方法（修正する、批判的に読む、自分にあった本を選ぶ、反応する）

「優れた読み手が使っている方法」においても、スキルを活用して用いる必要がある。吉田の提案は方略との記載はないが、意図的にスキルを用いて方略的に読むことを読みの方法としている。よって、本研究では吉田の方法は、方略として位置付ける。

佐藤（2017）は、アクティブラーニング〈読みの方略〉として次を示している。

アクティブラーニング〈読みの方略〉

- 1 叙述を〈根拠〉として正しく入力する
- 2 既有知識や既有経験を賦活する
- 3 複数の叙述を響き合わせる
- 4 作品の周縁情報を仕入れる
- 5 〈視点人物〉は誰か
- 6 中心人物と対役は誰か
- 7 中心人物の心情はどう変化したか
- 8 様々な作品構造を〈対比〉する
- 9 〈メタファー（隠喩）〉を読む
- 10 作品を意味付ける・自分の世界の再構築

佐藤のアクティブラーニング〈読みの方略〉では方略の要素もスキルの要素も含まれている。例えば、「1 叙述を〈根拠〉として正しく入力する」は叙述からわかる情報を処理しているという点から本研究ではスキルの基準に当てはまる。一方で、「10 作品を意味付ける・自分の世界の再構築」では、作品を読み手が消化しようとする目的等において作用しているため方略になる。

白石（2011）は、文学作品の 10 の観点として次を挙げている。

「文学作品の 10 の観点」

- ①時・場所
- ②登場人物
- ③中心人物
- ④語り手
- ⑤出来事
- ⑥大きく変わったこと
- ⑦三部構成（はじめ・中・おわり）
- ⑧お話の図・人物関係図
- ⑨一文で書く
- ⑩おもしろさ

この 10 の観点をを用いることで、作品の内容理解を図っている。「①時・場所」のように作品によっては抑えることが容易なものもあれば、「③中心人物」を探るために他の観点を生かすなど他観点との結びつきが必要となる作品もある。白石の提案も佐藤と同様にスキルの観点と方略的な観点が組み合わされている。

このようにスキルと方略は混在し、互いに関わり合っている。方略とスキルに共通することは、多面的・多角的に読むことである。作品を一つの視点ではなく、幅広い視点から見ることによって読みが深まる。スキルと方略は乖離しているのではなく、「読むこと」において相互に強く関わり合っている。

2. 水平思考の必要性とシックスハット法の有効性

読みの方略についての検討を通し、「読むこと」において、「スキル」や「方略」が先行していくのではなく、学習者の読みの思考過程に添った中で活用されていく必要性を見いだした。そこで着目したのが水平思考という思考方法である。

水平思考とは、エドワード・デ・ボノ（2015:3-4）が「簡単に自然な創造的思考法を通じて、新たなアイデアを生み出すように脳を仕向けることを強調」することを狙いとして作った造語である。一つの物事を集中して論理的に深堀して考えを深める垂直思考とは対極にある考え方だ。

水平思考の考え方の一つにシックスハット法がある。シックスハット法とは、同じくデボノが考案したものだ。多くのことを一度に考える時、感情や論理、創造の視点が複雑に絡み合い、思考の妨げになる。その複雑な視点を紐解き、一点ずつ考える思考法がシックスハット法である。シックスハット法の帽子は6色ありデボノ（2016:36-37）の各色の視点をまとめると次の通り（表1）である。

表1. シックスハット法の帽子・色のイメージ・視点

帽子	色のイメージ	視点
白の帽子	中立で客観的	客観的な事実と数値（データ）の視点
赤の帽子	怒りや情熱、感情を暗示	感情的な視点
黒の帽子	生真面目で思慮深い	警戒と注意を促し、考え方の弱点を指摘する視点
黄の帽子	明るく積極的	楽観主義・希望と肯定的な視点
緑の帽子	草木など植物、実り豊かな成長を連想	創造性と新しい考えの誕生の視点
青の帽子	冷静さ、空の色、すべてを超越	調整に関連し、考え方のプロセスを構成したり、他の帽子の使い方を統制したりする視点。

シックスハット法は企業の会議等でも活用されており、各帽子の視点は文学教材の読解に沿うのであると予測した。読みの方略は思考の場である。さまざまな思考方法の展開の中で、読みの方略は活用されていく。よって、シックスハット法の思考方法は作品を多面的・多角的に読むことに効果的であると予想する。先述の4氏の提案を6つの帽子と対応させると次のようになった（表2）。複数の帽子と関わる項目があるため、対応させる際は関わりの深い色と提案を優先するようにした。

表2. シックスハット法と方略・スキルの対応表

帽子の色	山元 「課題への反 応方略」	吉田 「優れた読み手 が使っている 方法」	佐藤 アクティブラー ニング 〈読みの方略〉	白石 「文学作品の10 の観点」
白 客観的な 事実と数値	- 関係づける - 記述する	- 関連づける - 推測する - 反応する	1 叙述を〈根拠〉として正しく入力する 2 既有知識や既有経験を賦活する 4 作品の周縁情報を仕入れる 5 〈視点人物〉は誰か 6 中心人物と対役は誰か 7 中心人物の心情はどう変化したか	①時・場所 ②登場人物 ③中心人物 ④語り手 ⑤出来事 ⑥大きく変わったこと ⑦三部構成（はじめ・中・おわり）

赤 感情	・没入する	・イメージを描く ・反応する		
黒 警戒と注意 弱点を指摘		・質問する ・推測する ・批判的に読む		
黄 楽観主義・希望 肯定的	・判断する	・推測する ・反応する	10 作品を意味付ける-自分の世界の再構築-	⑩おもしろさ
緑 創造性 新しい考えの誕生	・解釈する	・質問する ・推測する ・何が大切かを見極める ・解釈する	3 複数の叙述を響き合わせる 8 様々な作品構造を〈対比〉する 9 〈メタファー（隠喩）〉を読む	⑩おもしろさ
青 調整 考え方の過程を構成	・記述する ・判断する	・関連づける ・推測する ・修正する ・自分にあった本を選ぶ	10 作品を意味付ける-自分の世界の再構築-	⑧お話の図・人物関係図 ⑨一文で書く ⑩おもしろさ

方略と各帽子の色は対応している。先行研究の検討においてスキルと方略が混在していると述べたが、表に表すことでスキルに近い項目が白の帽子に分類される傾向を見ることができる。また、黒の帽子の読みに係るものが吉田（2017）の提案のみである。現行の提案では、批判的に読むことに着目しているものが少ないため、黒の帽子の批判的な読みの視点をもつことは、さらなる読みの幅の広がりにつながると期待できる。以上の先行研究の検討により以下の2点を仮説として設定する。

- ・シックスハット法を活用した読みの授業は、読みの方略の獲得に有効である。
- ・黒の帽子の批判的に読むことが読解の幅の広がりにつながる。

Ⅲ 研究Ⅰ 大学生への検証方法と結果及び分析

1. 検証方法

仮説を基に、自由な読みとシックスハット法を活用した読みの対照検証を通して、シックスハット法が読みの視点を広げることの効果的か否かを検討することにした。検証は次の要領（3）で行った。対象者へは、2組に分かれて検証を行うこと、その差異をフィードバックすることを伝え、全員に同意を得た上で検証を行った。

表 3. 大学生への検証要領

	自由な読み（A 群）	シックスハット法を用いた読み（B 群）
対象	大学 2 年生 17 名（A 群 B 群で別の学生）	
日時	2023 年 10 月 13 日 10 : 15~10 : 55	2023 年 10 月 13 日 11 : 00~11 : 40
教材	『鳴く虫』 高橋元吉	
時間	40 分	
過程	〈話し合いの過程〉	赤

①各班で意見交流	白
②各班の意見を全体交流	緑 1
③【話題 1】「宝石」が音・声・個性かについて	黄 1
④【話題 2】平仮名表記と漢字表記の違いについて	黒
⑤班で「宝石」が音・声・個性か決め、全体発表	黄 2
	緑 2
	青

大学二年生 34 人を無作為に A 群と B 群に分けた。A 群では、教材を配布した後、教師が一切介入せず学生のみで意見の交流をする自由討議だ。B 群では教材を配布した後、シックスハット法を用いて教師が帽子の色とその説明を伝え、考えたり発表したりする方法を取った。シックスハット法の帽子の順は読みの方略と照らし合わせて独自に順序を考案した。

検証で使う教材は高橋元吉の『鳴く虫』（教育出版 5 年上）である。『鳴く虫』は、「宝石工場」や「磨いている」など比喻が多く使われている作品である。一回読むだけでは内容を理解することは難しく、何度も読む中で作品の読みに変化が現れる教材で、本研究の検証に適した教材であると判断した。

2. 結果及び分析

A 群で発表された意見と B 群で発表された意見をシックスハット法の 6 色で分けて図に表すと図 3 のような結果となった。

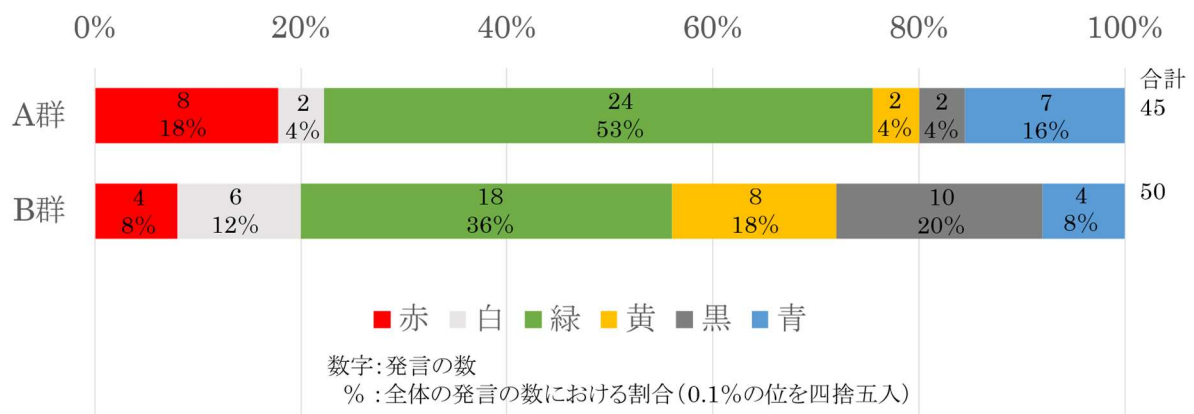


図 3. シックスハット法に当てはめた発言の割合

A 群は自由な読み合いであるため、各色の発言にばらつきがある。発言は赤・緑・青の帽子が中心になっているため、視点を意識せずに話し合ったときにしやすい視点は赤・緑・青の帽子ということが伺える。B 群は、教師が思考の視点を示しているため、複数の見方が均等な割合で出現している。B 群は、A 群と比較すると、具体的な本文箇所や経験の事例を挙げながら発表していたことが特徴として挙げられる。

また、黒の帽子に着目すると、A 群での発言は 2 回に留まり、B 群は 10 回の発言となった。この黒の帽子の発言がもととなって黄色の共感的な読みや緑の新たな読みの創造に作用し、より詩の内容を深く読むということにつながっているが、やはり、B 群にその優位性を見ることができた。

A 群、B 群ともに方略が作用している場面を認めることができたが、シックスハット法を用いた B 群のほうがより自然な形で読みの方略を引き出すことができた。それは、思考方法と読みの方略の結びつきによるものと推察できる。

IV 研究Ⅱ 小学生への検証方法と結果及び分析

1. 検証方法

次に、シックスハット法を用いた国語科の授業を小学生対象に実施し、小学生への読みの作用を検証した。検証にあたり、子ども達の読みの中でどのような方略が出てくるかに着目した。検証は次の要領（表⑤）で行った。

表 5. 小学生の検証過程

	a 群	b 群	c 群	d 群
対象	A 小学校 6 年生 26 名	A 小学校 6 年生 24 名	B 小学校 5 年生 20 名	B 小学校 5 年生 22 名
日程	2023 年 11 月 10 日 2 校時 9 : 40～10 : 25	2023 年 11 月 10 日 3 校時 10 : 45～11 : 30	2023 年 11 月 17 日 2 校時 9 : 40～10 : 25	2023 年 11 月 17 日 3 校時 10 : 40～11 : 25
教材	『鳴く虫』 高橋元吉			
時間	45 分			
過程	赤 白 緑 1 黄 1 黄 2 黒 黄 3 緑 2 青	白 赤 緑 1 黄 1 黒 黄 2 緑 2 青	赤＋白 緑 黄 黒 青	赤 白 緑 黄 黒 青

4 回の検証でシックスハット法の過程は意図的に変化させながら検証した。a 群では過程を 9 つこなすと思考や意見共有を深めることが十分にできなかった。そこで、b 群では思考の時間を設けるために、過程を 8 つにした。しかし、依然として思考時間の短さが課題であった。

赤と白の帽子的順の変化については、どちらを先に持ってくることで見方の広がりが生まれるか確かめるために順序を入れ替えた。c 群では、赤と白の帽子を同時に行った。A 小学校の検証から白の帽子の見方の時に赤の帽子の見方が出ることやその逆もあったため、子ども達にとって考えが浮かびやすい帽子を選択できるようにしようと考えた。しかし、かえってどちらの帽子を選択すればよいかという悩みを生み出してしまった。d 群では、もう一度赤と白の帽子を分けて行った。赤の帽子を先にした意図は A 小学校で検証を行ったときに白に比べ子ども達が考えを出しやすい様子であったためだ。

2. 結果及び分析

授業の際に子どもが記述したワークシートを基に色ごとに出た意見を整理し、KH コーダーを活用して分類した。分析に当たり、抽出語の最小出現数を 2 に設定し、語と語の共起関係を読み取った。

赤の帽子の結果について分析する。図 4 では、抽出後が 90 語ある中で「思う」は 3 番目に多い頻度で登場し 34 回記述に含まれていた。1 位「宝石」64 回、2 位「虫」54 回に続いての多さである。「表す」と「表現」は合わせると 17 回の記述がある。この「表す」「表現」と繋がっている語が「良い」だ。このことから、赤の帽子では作品の表現の価値づけを行っているといえる。「分かる」については 9 回の記述があった。「分かる」の詳細を原文に戻って見てみると、「分からない」「分かりにくい」「分からなかった」と否定形として使われているものが 9 回中 7 回であった。これは、自分の知識と結び付けて読み解こうとしているといえる。分からない理由を明らかにしようとすることも方略の活用につながる。このことより、赤の帽子は作品を読んで子ども自身がどう思ったかという見方を中心にして、作品と読み手の対話が行われているといえる。

	抽出語	品詞/活用	頻度
1	宝石	名詞	64
2	虫	名詞C	54
3	思う	動詞	34
4	聞く	動詞	24
5	声	名詞C	16
6	鳴く	動詞	15
7	表す	動詞	12
8	分かる	動詞	9
9	良い	形容詞	8
10	それぞれ	副詞可能	7
11	音	名詞C	7
12	工場	名詞	7
13	個性	名詞	6
14	鳴き声	名詞	6
15	倒れる	動詞	6
16	たくさん	副詞可能	5
17	音色	名詞	5
18	言う	動詞	5
19	心	名詞C	5
20	草	名詞C	5
21	表現	名詞	5
22	感じ	名詞	4
23	作者	名詞	4
24	詩	名詞C	4
25	豊か	形容動詞	4
26	面白い	形容詞	4
27	綺麗	形容動詞	4
28	意味	名詞	3
29	自分	名詞	3

図 4. 赤の帽子的抽出語リスト

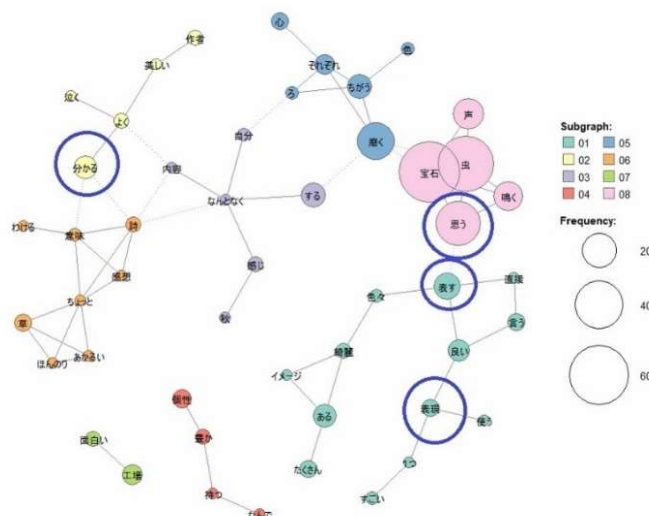


図 5. 赤の帽子的共起ネットワーク

赤の帽子に大きく関わる方略は、山元（2005）の「没入する」だ。「なんとなく」や「感じ」という語からわかるように、赤の帽子は内容を明確に捉える段階には至っていない。その中で作品を素直に読んでいくことを通し、自分の気持ちを整理しながら読みを行っていく準備となっていた。

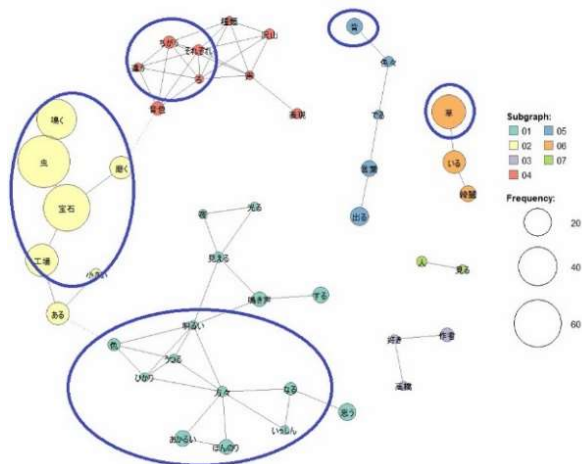


図 6. 白の帽子

白の帽子の結果について図⑤の青色の円で囲っている箇所は、『鳴く虫』の本文中にある語である。このことから、白の帽子で作品を捉えることは、叙述を基に作品を見ることに効果的であるといえる。佐藤（2017）の方略「1 叙述を（根拠）として正しく入力する」に強く結びついている。

青色の円で囲った言葉から派生しているものもある。例えば、「草」から派生して「綺麗」につながっている。「綺麗」は本文中に書いていない言葉のため、子どもが作品から想像した景色である。よって、白の帽子を用いることにより叙述を捉えることや、その叙述から子ども自身のイメージを膨らませることができるといえる。

白の帽子は吉田（2017）の方略、「関連づける」「イメージを描く」「推測する」と関わる。最も効果的な方略は山元（2005）の「記述する」とする。叙述からの情報整理と、そこから読み取れることを、書き表していくことが白の帽子の中心となるためだ。

赤・白の帽子では、普段の学習習慣に置き換えると初読の感想に近い部分があ

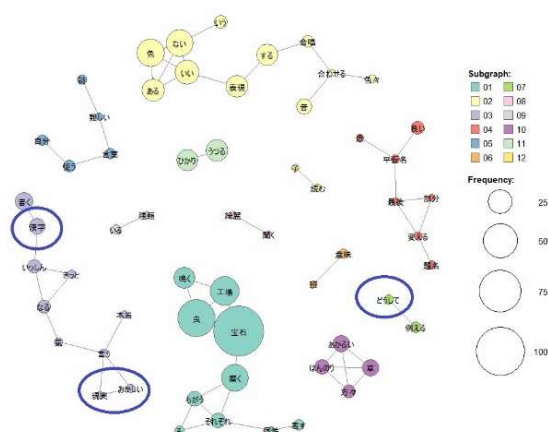


図 7. 緑の帽子

る。赤の帽子ではより自身の経験や読み取りに添ったものが、白の帽子ではより叙述を基にした読み取りが表れていた。

緑の帽子について、まず「おかしい」という記述に着目した。「おかしい」は「現実」という言葉に繋がっており、原文に戻ると「現実ではおかしい」という記述がみられた。「おかしい」は作品に対して批判的に読んでいるといえる。よって、実際の思考では緑の帽子からも批判的な読みが生まれることが分かった。

緑の帽子では赤・白の帽子と比べ、注目する視点が変わっている。例えば、漢字に着目して 11 人が記述していた。漢字表記か否かについては、白の帽子の事実や情報の視点である。しかし、白の帽子の際には、漢字に着目した記述はなかった。緑の帽子の際に漢字が注目された原因は、本文中の「いっしん」や「いろ」、「あかるい」が平仮名表記になっておりその点についての話題が上がったことに関わる。緑の帽子での思考を通して、白の帽子の視点のさらに細かい点まで見るできるようになったといえる。

また、「どうして」という疑問の語や「変える」という提案の語が多く出ている。「どうしてこのような表現にしたのか」「どうして宝石工場と例えたのか」「どうして宝石工場と言うのか」「どうしてそれぞれちがった色の宝石をみがいているのか」など、「どうして」という疑問詞を叙述に付け加えることで注目する視点を絞った問いを立てていた。

緑の帽子では特に吉田（2017）の「質問する」「推測する」の方略が作用している。「どうして」という疑問詞をつけて作品に対して問いをつくる場面が見られたことから、「質問する」という方略。緑の帽子特有の新しい意見を創造する点から「推測する」に重点をおいた。

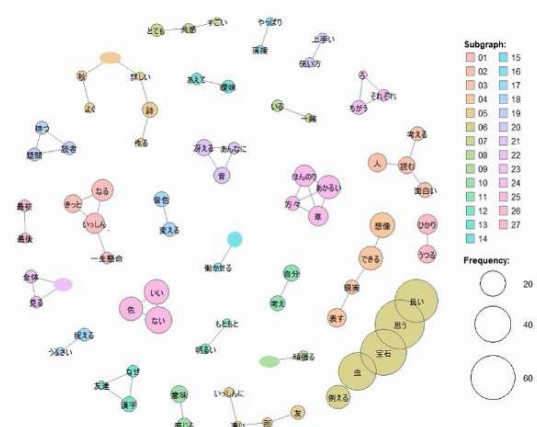


図 8. 黄の帽子
(児童の名前は塗りつぶした)

黄の帽子では、サブグラフが 27 もあり、他の帽子と比較しても圧倒的に多く、個人によって着目点が多くなることが多いと捉えられる。他の帽子よりも意見がすぐに出ていたことから、子どもにとって思考しやすい帽子といえる。

緑の帽子では「現実ではおかしい」と捉えていた点について、黄の帽子では「現実ではできないことを想像で表している点が良い」と肯定的に捉えている。黄の帽子で作品を見ることによって批判的に捉えた点をただ批判で終わるのではなく、そこに価値を見いだす作用が生まれた。よって、緑・黄の帽子で同じ個所を見ることで見方が 2 通りに増え、さらにその箇所についての検討が深まるといえる。

黄の帽子で特に用いられている方略として、吉田（2017）の「反応する」が当てはまる。先行研究の方略の中には含まれていないが、良いところみつけを通して、黄の帽子特有の作品の価値についての反応が大きく表れていた。加えて、友人の読みについて反応することを通して読みの対話性も埋まっていた。

黒の帽子に最も対応する方略は、吉田（2017）の「批判的に読む」である。黒の帽子の結果について、まず「分かる」に着目する。「分かる」は原文に遡ると 1

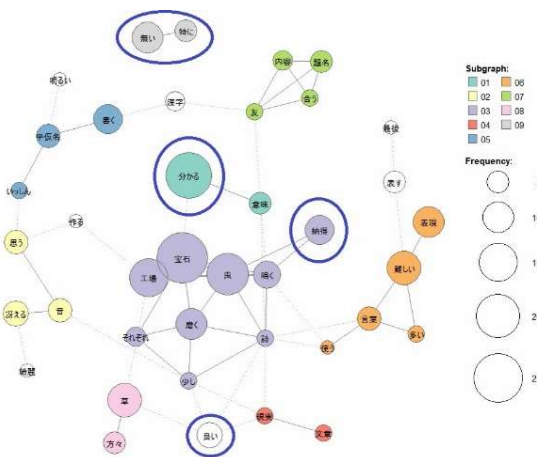


図 9. 黒の帽子

語を除いて「分からない」等の否定形に繋がっていた。「納得」についても1語を除き「納得できない」と否定形に繋がっている。このことより、子どもが分かるか分からないかを批判の材料にし、理解できるか否かの自己内対話を通して判断しているといえる。

「(批判的に捉える箇所が) 無い」と答えていた記述が10個あった。このことから子ども達にとって批判的に捉えることに馴染みが無いと予測できる。「無い」と記述したものの中には緑の帽子において批判的な見方をしているものがあり、批判的な読みを自覚しないまま活用している場合があった。

「良い」に続く語としては、「良いんじゃないのか」「良さそう」と代案をだしているものも見られ、提案を入れた批判的な読みを行っていた。

批判的な読みとしてb群で効果的な場面があった。ある児童が「社会で工場は海に近いところにあると習ったから、草かげにあるのはおかしい。」と指摘した。この意見はb群の子ども達の社会科での既習事項を踏まえているため共感を多く生んでいた。「無い」と考えていた子どもも含め全員がもう一度作品に目を通し、他の児童も作品の矛盾や工場の捉え方について自身の経験と結びつけたり、表現に疑いをもったりと緑や黄の帽子の視点での思考が活発化するとともに作品へ没入していく様子が見られた。

青の帽子では、「本当」の「意味」や「考える (考えたい)」「知る (知りたい)」という見通しを持った意見が中心になっていた。

「題名」や「タイトル」について合計9人の記述があった。これまでの過程の中で題名は注目されることは少なかったが、ここで注目が集まっている点も、青の帽子の効果である。それぞれの帽子の見方で検討した後に一度俯瞰的に作品を眺めることによって「題名」との整合性という見方が加わった。子ども達の中で、「題名」について検討することが、作品を読み解くことに繋がるとの解釈が見える。

他の帽子では広がりを持っていたサブグ

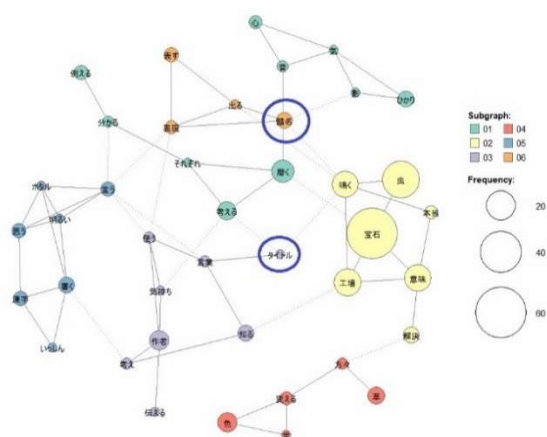


図 10.青の帽子

ラフだが、青の帽子では6つになっている。これは、今までの思考過程を整理しているといえ、青の帽子の効果を果たしているといえる。

青の帽子と最もつながりのある方略は山元 (2005) の「判断する」「関係づける」と吉田 (2017) の「関連づける」である。これまでの思考過程を俯瞰し「関係づける」ことを通して今後思考していくべきことを「判断する」過程が見られた。

V シックスハット法を活用した国語科の授業モデルの検討

Section3 眺める

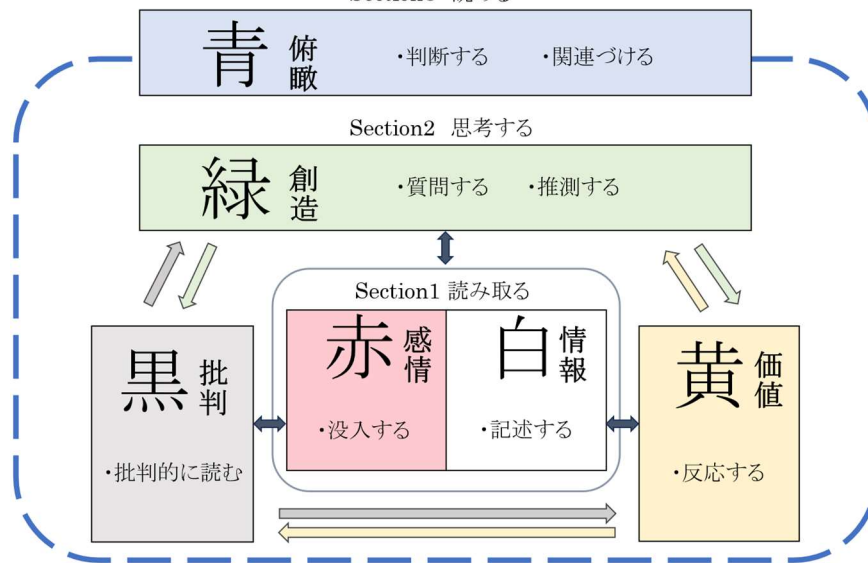


図 11. シックスハット法を活用した国語科の授業モデル

検証結果をもとに、上記のモデル図を提唱する。モデル図は3つの「Section」に分けた。本研究において「Section」として分けた意図は、「Step」のように段階的な過程の学びとせず「Section」同士が役割をもち相互に行き来するものとしたためだ。作用することが方略的に読むことを確固たるものにする。「Section」は読むことにおける部署的な意味を持つ。

「Section1 読み取る」では赤・白の帽子で状況を整理する。ここでは、スキルの読みを中心に活用し作品についての自身の捉え方や情報整理を行う。作品からわかることを表面的に捉え確実に分かる点を明確にし、「Section2」での見方の基とする。作品からの情報や自分の思いを読み取ることを目的とし、読みに没入していく section のため「読み取る」と名付けた。

「Section2 思考する」の場面では緑・黄・黒の帽子で見方を広げる。この3つの帽子がより方略意識をもって読み進めることに繋がる。緑・黄・黒の帽子が作用しあうことがKH コーダーを用いたテキストマイニングより分かった。読みの方略を活用して読むことには思考することが不可欠である。よって「Section2」は「思考する」と名付けた。各帽子について、特に黒の帽子の批判的に見る見方は、読みを深めていくことに大きく作用する。今回の検証において黒の帽子の見方に子ども達が多面的・多角的に読みを深める可能性を見いだした。活用法として、黄の帽子で広がったサブグラフを基に黒の帽子の見方を使ってみるができる。反対に黒の帽子で出た意見をもう一度黄の帽子で見ることで新たな価値を見つけることができる。「Section2」では、緑・黄・黒の三色の帽子が相互作用することによって、同じ個所においても見方を広げながら焦点が自然と絞ることができる。

「Section3 眺める」では、青の帽子で読みを俯瞰する。これまでの思考の過程を見つめ直し、見方や考え方を整理し今後の展開を考える。思考の過程を俯瞰して作品を読むことを踏まえ、全体を見る意味を持たせて「眺める」とした。小学校での検証において、青の帽子では自身の思考の過程や友人との交流を基にほとんどの子どもが検討したいことをワークシートに書くことができていた。

本研究は、中野（2021:28）の「批評する力を生成する個人内プロセスのモデル（文学教材）」を根拠の一つとする。中野は、「本質を見抜く」＝「何が大切か見極める」ことが「批評読み」とあり、Ennis,R.H.の批判的思考の能力や道田の批判的思考の過程等を

踏まえて、「批評する力を生成する個人内プロセスのモデル（文学教材）」を示している（図 12）。

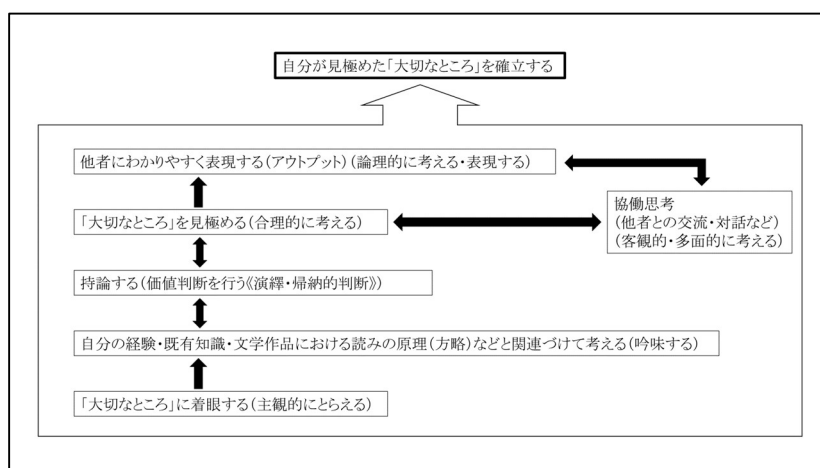


図 12. 批評する力を生成する個人内プロセスのモデル（文学教材）

「自分の経験・既有知識・文学作品における読みの原理（方略）などと関連づけて考える（吟味する）」は「Section1」に、「推論する（価値判断を行う《演繹・帰納判断》）」は「Section2」にて作品をより方略的に読む段階と類似している。2つの過程は「『大切なところ』を確立する」のプロセスの中で深い思考を必要とする過程である。よって＜シックスハット法を活用した国語の読みのモデル＞においても、「『大切なところ』を確立することにつながる」といえる。「Section3」は「『大切なところ』を確立する」の位置に当たる。中野のモデル案と比較した際の本研究の特質は、学級においての活用が可能であることだ。中野は個人内プロセスに着目していたことに対し、本モデル案では個人内に留まらず、学級全体で読みの方略が作用することを意識した。

VI 成果と今後の課題

本研究では、水平思考を生かした国語科授業モデルについて検討を重ねてきた。シックスハット法と読みの方略の結び付きを明示し、シックスハット法を用いることで、国語科の学びの中で獲得すべき「読みの方略」を多く活用できるようになることが明らかとなったことが成果だ。水平思考の幅広い見方は、国語科の「読むこと」において見方を広げ教材内容に留まらず教科内容を確認なものとし、教育内容へ広がりを見せる学びとなる。

今後、作成したモデル案を基に授業実践を重ね改良していく。授業実践において、教師の色の促しによって、子どもの思考に如何に作用し、自律的な読み手として育ていくのかを明らかにすることや、単元全体の中で活用や単元におけるシックスハット法の役割を明らかにしていく必要がある。展望として、本研究では、「読むこと」のみに着目して検討を重ねたが「話すこと・聞くこと」「書くこと」の他領域において、水平思考を取り入れることで国語科の教科内容・教育内容を学ぶことが可能になるか検討する余地がある。

引用・参考文献

- エドワード・デボノ（2015）『水平思考の世界 固定観念がはずれる創造的思考法』（藤島みさ子訳）、きこ書房。
- エドワード・デ・ボーノ（2016）『6つの帽子思考法—視点を変えると会議も変わる』（川本英明訳）、パンローリング株式会社。
- エリン・オリヴァー・キーン（2014）『理解するってどういうこと？「わかる」ための方法と「わかる」ことで得られる宝物』（山元孝春、吉田新一郎訳）、新曜社。

- 楠見孝・道田康司（2015）『批判的思考—21 世紀を生きぬくリテラシーの基盤—』,新曜社.
- 佐藤佐敏（2013）『思考力を高める授業 作品を解釈するメカニズム』,三省堂.
- 佐藤佐敏（2017）『国語科授業を変えるアクティブ・リーディング-“読みの方略”の獲得と“物語の法則”の発見』,明治図書.
- 佐藤佐敏（2021）『国語科の学びを深めるアクティブ・リーディング〈読みの方略〉の獲得と〈物語の法則〉の発見Ⅱ』,明治図書.
- 白石範孝（2011）『白石範孝の国語授業の教科書』,東洋館出版社.
- 白坂洋一・香月正登（2022）『「子どもの論理」で創る国語科授業スキル 構想・展開・省察の場で活用する指導技術』,明治図書.
- 鶴田清司（1995）「文学の授業で何を教えるか—教材内容・教科内容・教育内容の区別—」,全国大学国語教育学会編『国語科教育第 42 集』.
- 中野登志美（2021）「『批評読み』による文学的文章による授業デザイン」,岸本憲一良・中野登志美監修,花岡鉄平・住江めぐみ編『小学校国語科「批評読み」「提案読み」の課題・発問モデル』,明治図書.
- 松本修・西田太郎（2020）『小学校国語科〈問い〉づくりと読みの交流の学習デザイン 物語を主体的に読む力を育てる理論と実践』,明治図書.
- 道田康司（2008）「メタ認知の働きで批判的思考が深まる」,『現代のエスプリ』第 497 号,至文堂.
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編』.
- 山元隆春（2005）『文学教育基礎論の構築 読者反応を核としたリテラシー実践に向けて』,溪水社.
- 山元隆春（2014）『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』,溪水社.
- 吉田新一郎（2010,2017）『「読む力」はこうしてつける』,新評論.（2017 は増補版）
- Beach,Richard.（1987）”*Strategic Teaching in Literature*” in Jones, B.F.et.al.（eds.）*Strategic Teaching and Leading Association for Supervision and Curriculum and Development*.
- Ennis,R.H（1985）”*A logical basis for measuring critical thinking skills*”. *Educational Leadership*, Vol43.
- Paris,S.C.,Wasik,B.A.,&Turner,J.C.（1991）”*The Development of Strategic Readers*”in Barr et.al（eds.）*Handbook of Research Longman*.

梅光子ども未来会議会則

(名称)

第1条 本会は、梅光学院大学子ども未来会議と称する。

(事務局)

第2条 本会の事務局は、梅光学院大学子ども学部子ども未来学科内(山口県下関市向洋町1-1-1)におく。

(目的)

第3条 本会は、子どもの成長や社会の未来に関わる総合的な研究を促進していく(以下「研究事業」という。)と同時に、子どもの成長や地域づくりに実践的に関わっていくこと(以下「ボランティア・地域貢献事業」という。)を通して、子どもの未来を豊かなものとして創造していくことを目的とする。

(事業)

第4条 本会は、前条の目的を達成するために、以下事業を行う。

- (1) 研究会・講演会等の開催(研究事業)
- (2) 『子ども未来学研究』の発行(研究事業)
- (3) 子育て・地域づくり事業(ボランティア・地域貢献事業)
- (4) その他、本会の目的に資する事業

(会員)

第5条 本会の会員は、次のとおりとする。

- (1) 教職員会員
- (2) 卒業生会員
- (3) 一般会員

(会員の資格)

第6条 会員の資格は、次のとおりとする。

- (1) 教職員会員は、子ども学部 zu 所属し、本会の目的に賛同し、子ども未来学に関連する研究に従事し、あるいは関心のある教職員とする。
- (2) 卒業生会員は、梅光学院大学子ども学部を卒業し、卒業後も子ども未来学に関連する研究を行う意思もしくは子ども未来学に関心のある個人とする。
- (3) 一般会員は、本会の目的に賛同し、子ども未来学に関連する研究を行う意思もしくは子ども未来学に関心のある個人とする。

(会費)

第7条 当面の間、会費は無償とする。

(役員)

第 8 条 本会を運営するために、次の役員をおく。

(1) 理事 2～5 名(内会長 1 名、事務局長 1 名を含める。)

(役割)

第 9 条 会長は、子ども学部長とし、本会を代表し、会務を総括する。

2 事務局長は、会長が任務遂行に支障があるときには、その会務を代行する。

(任期)

第 10 条 役員の任期は 2 年とする。ただし、再任は妨げない。

(会議)

第 11 条 本会の会議は、理事会とする。

(総会)

第 12 条 会員より申し出があるときには、総会を開催することができる。理事会は総会での議決を尊重するように努めこととする。

(理事会)

第 13 条 理事会は、会長が招集し、会務を処理する。

2 理事会の運営規則は、別に定める。

(会計)

第 14 条 本会の経費は、子ども学部からの拠出金、会費、寄付金及びその他の収入をもって支弁する。

(会計年度)

第 15 条 本会の会計年度は毎年 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終る。

(所管部署)

第 16 条 この規則に関する事務は、子ども学部の所管とする。

(改廃)

第 17 条 この規則の改廃は、理事会の承認を得るものとする。

附 則 この会則は、2005 年(平成 17 年)10 月 1 日から施行する。

附 則 この会則は、2010 年(平成 22 年)11 月 27 日から施行する。

附 則 この会則は、2024 年(令和 6 年)4 月 1 日から施行する。

「梅光学院大学子ども学部子ども未来学研究」投稿規定

1 内容

(1) 梅光学院大学子ども学部子ども未来学研究（以下、子ども未来学研究）は、梅光子ども未来会議（以下、子ども未来会議）会員の学術研究の成果を発表するためのものである。

2 投稿資格

(1) 子ども未来学研究に単独又は連名の場合の筆頭著者として投稿できるのは、子ども未来会議会員とする。

(2) 連名で投稿する場合、前号以外の者を連名著者として著者に加えることができる。ただし、前号以外の著者については、論文中に所属を明記する。

3 投稿編数

(1) 単独で投稿できるのは、原則 1 人 1 編とする。このほかに連名投稿 1 編の著者となることができる。連名投稿のみの場合は 2 編までとする。ただし、子ども未来会議が組織する研究プロジェクトにかかわるものは、この投稿編数に含めない。

4 経費の負担

(1) 掲載論文の別刷り代については実費を請求することがある。

(2) カラー印刷等、特別の経費を必要とする場合は、著者（連名の場合は筆頭著者）の負担とする。

(3) 連名著者に 2－(1) 以外の者が含まれる場合、経費の一部を筆頭著者の負担とすることがある。

5 投稿手続

(1) 単独又は筆頭著者として投稿を希望する者は、編集委員会が定める期日までに申し込む。

(2) 投稿を申し込んだ者は、編集委員会が定める期日までに、完全原稿を提出する。

6 執筆要領

(1) 投稿原稿の字数は、原則として邦文で 12,000 字以内とし、英文は第 3 項に定めるとおりとする。なお、邦文の場合は英文題目を付するものとする。

(2) 投稿原稿の本文の前に、「題目」、「執筆者名」、「要旨」、「キーワード」の順に記載することとし、次の各号に留意する。

-1. 要旨は、約 200 字

-2. キーワードは、3 語から 5 語

(3) 投稿原稿は、A4 サイズ横書き、一段組み、余白（上下左右各 30mm）、横 40 字、縦 36 行、MS 明朝体 10.5 ポイント（適宜ゴシック体等のフォント使用可）とし、ページ設定は下部中央とする。

(4) 章、節の表記については、原則として「I、1.、(1)、(a)」の順とする。

(5) 本文中の引用文は「」で括り、文献名を同条第 7 項の規定に従って明記する。

(6) 注は、本文の記述を簡潔にするために、本文の内容に密接に関連して補足する必要がある場合に限って用いる。本文中の該当箇所の右肩に右片括弧付きで通し番号を付し、本文の後にまとめて番号を付して注の内容を記す。

(7) 参考文献は、本文又は注で言及したもの及び図表で使用したものをすべて掲げ、次の各号のとおりとする。

-1. 著者名、発行年、題名、出版社の順に記載する。

-2. 邦文の書名は『』で括り、欧文の書名はイタリック体又は下線を引く。

-3. 参考文献が論文の場合、邦文論文は「」で、欧文論文は“”で括り、出典の書名等を明記する。

-4. 参考文献の配列は、日本語文献、中国語文献、韓国（朝鮮）語文献、欧語文献とする。

-5. 日本語文献は、著者名の五十音順に並べる。

-6. 中国語文献及び韓国（朝鮮）語文献は、それぞれ著者名の当該言語の固有の配列順又は片仮名表記の五十音順に並べ、欧語文献は、著者名（姓が先）のアルファベット順に並べる。

-7. 同じ著者の文献は発表順に並べ、同じ発表年のものが複数ある場合には、引用順に「a、b、...…」を付して並べる。

(8) 図、表、写真の掲載を希望する場合は、本文中の挿入箇所に適宜大きさを調整して貼り付け、図、表、写真ごとに「図 1」、「表 1」、「写真 1」のようにそれぞれ通し番号をつける。なお、原則として提出原稿の大きさのまま論集に掲載する。

7 著作権

(1) 子ども未来学研究に投稿された論文の著作権は著者に帰属し、著者が自らの著作物を利用するときは、子ども未来会議として何ら制約しない。

(2) 投稿に際しては、「梅光学院大学学術機関リポジトリ公開要領」にしたがい、「学術論文等利用許諾書」を提出する。これにより、投稿された論文の複製権、公衆送信権の譲渡について許諾する。

8 倫理的配慮

(1) 論文に掲載する個人や団体の情報の取扱については投稿者の責任の下に十分に配慮する。

(2) 人や動物を対象とする研究を行う場合、関係学会のガイドラインに従う等、投稿者の責任の下に十分に配慮する。また、実際にどのような配慮をしたかを論文中に明記することが望ましい。

(2) 共同研究を行った場合、各共同研究者が連名著者となるか否か、連名の順序が貢献度を反映する適切なものであるか否か等について、投稿者の責任の下に十分に配慮する。

9 子ども未来学研究の編集

(1) 「6 執筆要領」にしたがわない原稿は、原則として受理しない。

(2) 子ども未来学研究の編集業務は、編集委員会で行う。

(3) 子ども未来学研究への論文の採否は編集委員会が決定する。

附則

本規定は平成 20 年 11 月 20 日から施行する。

平成 21 年 11 月 12 日一部改正

令和 5 年 11 月 16 日一部改正